

トマト（ミニトマトはミニトマトの項を参照）

農薬取締法上「トマト」は、直径が3cmより大きなものとしている。

果径3cm以下のものは、「ミニトマト」に適用のある農薬を使用すること。

————— 発病・加害時期
 = = = = = 発病・加害最盛期

作型・病害虫名	月												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
ハウス半促成 露地早熟			▲ 定植			■ 収穫							
疫病													
かび病													
すすかび病													
灰色かび病													
うどんこ病													
細菌核枯病													
青萎凋病													
かいよう病													
輪紋病													
ウイルス病（黄化葉巻病）													
コナジラミ類													
アブラムシ類													
オオタバコガ													
ハスモンヨトウ													
ハモグリバエ類													
ハダニ類													
トマトサビダニ													
加温周年（養液栽培）	-----加温----- □ ■ ● ▲ は種												
疫病													
かび病													
すすかび病													
灰色かび病													
うどんこ病													
ウイルス病（黄化葉巻病）													
コナジラミ類													
アブラムシ類													
オオタバコガ													
ハスモンヨトウ													
トマトキバガ													
ハモグリバエ類													
トマトサビダニ													

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

疫病

留意事項

- 1 低温（20℃前後）で多雨が続くと、発生が多くなる。
- 2 予防的散布が大切である。
- 3 急激に発病が広がるので、初発をよく確認し、防除を徹底する。
- 4 QoI剤《11》は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
- 5 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤、リドミルゴールドMZはかぶれやすいので注意する。
- 6 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤、リドミルゴールドMZの成分マンゼブの総使用回数は2回以内。

防除方法

- 1 浸水を避け、排水を良好にし、窒素質肥料の過用を避ける。
- 2 土の跳ね上がり防止のため、敷わらなどでマルチングする。
- 3 なす科作物（なす、トマト、ピーマン等）の連作を避ける。
- 4 被害葉や被害果は、早めに除去するとともに、被害株は収穫後、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ジマンダイセン水和剤](#)、[ペンコゼブ水和剤](#) <M3> 【800倍 前日/2回】
 - ・ [ランマンフロアブル](#) <21> 【1000~2000倍 前日/4回】
 - ・ [ピシロックフロアブル](#) <U17> 【1000倍 前日/3回】
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [プロポーズ顆粒水和剤](#) <M5> <40> 【1000~1500倍 前日/3回】
 - ・ [リドミルゴールドMZ](#) <M3> <4> 【1000倍 前日/2回】
 - ・ [ホライズンドライフロアブル](#) <27> 《11》 【1500~2500倍 前日/3回】

葉かび病

留意事項

- 1 過湿条件で発生する。
- 2 多発時には、防除が困難であるため、予防的散布が大切である。
- 3 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 4 QoI剤《11》、SDHI剤《7》は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
- 5 すすかび病と病徴が似ているため、薬剤防除の際は注意する。
- 6 ダコニール1000、プロポーズ顆粒水和剤の成分TPNの総使用回数は合計6回以内（但し、土壌かん注は2回以内、散布、常温煙霧及びくん煙及びエアゾル剤の噴射は

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

合計4回以内)。

- 7 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は、かぶれやすいので注意する。
- 8 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤の成分マンゼブの総使用回数は合計2回以内。
- 9 アミスター20フロアブルは薬害の恐れがあるため、浸透性を高める展着剤を加用しない。

防除方法

- 1 密植を避ける。
- 2 葉かび病抵抗性品種を用いる。
- 3 窒素質肥料の過用や肥料切れを避ける。
- 4 施設栽培では、過湿にならないように、かん水、換気、温度管理に注意する。
- 5 被害茎葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 6 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ジマンダイセン水和剤](#)、[ペンコゼブ水和剤](#) <M3> 【800倍 前日/2回】
 - ・ [ダコニール1000](#) <M5> 【1000倍 前日/4回】
 - ・ [ベルコートフロアブル](#) <M7> 【2000~4000倍 前日/3回】
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [プロポーズ顆粒水和剤](#) <M5> <40> 【1000倍 前日/3回】
 - ・ [アミスター20フロアブル](#) <<11>> 【2000倍 前日/4回】
 - ・ [アフェットフロアブル](#) <<7>> 【2000倍 前日/3回】
- 8 施設内では、くん煙剤も有効である。(Ⅻ省力安全防除 1くん煙(1) 参照)

すすかび病

留意事項

- 1 過湿条件で発生する。
- 2 多発時には、防除が困難であるため、予防的散布が大切である。
- 3 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 4 QoI剤<<11>>、SDHI剤<<7>>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
- 5 葉かび病と病徴が似ているため、薬剤防除の際は注意する。

防除方法

- 1 密植・過繁茂を避ける。
- 2 施設栽培では、過湿にならないように、かん水、換気、温度管理に注意する。
- 3 被害茎葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [ダコニール1000](#) <M5> 【1000倍 前日／4回】
 - ・ [ベルコートフロアブル](#) <M7> 【2000～4000倍 前日／3回】
 - ・ [クプロシールド](#) <M1> 【1000倍 発病前～発病初期／－】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
- ・ [トリフミン水和剤](#) <3> 【3000倍 前日／5回】
 - ・ [ファンタジスタ顆粒水和剤](#) <<11>> 【2000～3000倍 前日／3回】
 - ・ [ケンジャフロアブル](#) <<7>> 【1500倍 前日／3回】

灰色かび病

留意事項

- 1 低温（20℃前後）で多湿時に発生が多い。
- 2 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 3 QoI剤<<11>>は、薬剤耐性菌が出現しやすいので1作1回程度の使用に努める。
- 4 ボトキラー水和剤は気温10℃以上で使用する。
- 5 ボトキラー水和剤は拮抗微生物を成分とする薬剤で他剤との混用には注意が必要である。
- 6 ボトキラー水和剤は、暖房機ダクトが設置されている施設では、ダクト内投入による処理法も有効である。（Ⅻ省力安全防除 2ダクト内投入 参照）

防除方法

- 1 施設内の換気を良好にし、過湿にならないように注意する。
- 2 わらまたは、ポリフィルムなどでマルチングを行う。
- 3 開花後の花卉をとり、病原菌の侵入を防ぐとともに被害葉・被害果を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ベルコートフロアブル](#) <M7> 【2000～4000倍 前日／3回】
 - ・ [セイビアーフロアブル20](#) <12> 【1000～1500倍 前日／3回】
 - ・ [ボトキラー水和剤](#) <BM2> 【野菜類 1000倍 発病前～発病初期／－】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ゲッター水和剤](#) <1> <10> 【1000～1500倍 前日／5回】
 - ・ [ロブラール水和剤](#) <2> 【1000～1500倍 前日／3回】
 - ・ [ファンタジスタ顆粒水和剤](#) <<11>> 【2000～3000倍 前日／3回】
 - ・ [ピクシオDF](#) <17> 【2000倍 前日／4回】
- 6 施設内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除 1くん煙（1） 参照）

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

うどんこ病

留意事項

- 1 乾燥条件・日照不足で、気温20～25℃で発生が増える。
- 2 多発時には防除が困難であるため、予防的散布が大切である。
- 3 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 4 SDHI剤≪7≫は耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 密植を避け、通風をよくする。
- 2 窒素質肥料の過用を避ける。
- 3 施設内では適度のかん水を行い、過乾を避ける。特に温風暖房を行うところでは注意が必要である。
- 4 被害茎葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ダコニール1000](#) <M5> 【1000倍 前日/4回】
 - ・ [ベルコートフロアブル](#) <M7> 【2000～4000倍 前日/3回】
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アフエットフロアブル](#) ≪7≫ 【2000～4000倍 前日/3回】
 - ・ [パルミノ](#) <M10> 【2000倍 前日/5回】
 - ・ [パンチョTF顆粒水和剤](#) <3> <U6> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [ショウチノスケフロアブル](#) <9> <U13> 【2000倍 前日/2回】

菌核病

留意事項

- 1 気温20℃前後、多湿条件で発生が多い。
- 2 QoI剤≪11≫、SDHI剤≪7≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 施設栽培では換気に努める。
- 2 夏期たん水して、土壌中で越冬している菌核を死滅させる。
- 3 加温栽培では、夕方早めに加温し、多湿にならないようにする。
- 4 被害果や被害茎葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アフエットフロアブル](#) ≪7≫ 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [ゲッター水和剤](#) <1> <10> 【1000～1500倍 前日/5回】
 - ・ [ファンタジスタ顆粒水和剤](#) ≪11≫ 【2000～3000倍 前日/3回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [スクレアフロアブル](#) << 1 1 >> 【2000倍 前日／3回】
- ・ [ピクシオDF](#) << 1 7 >> 【2000倍 前日／4回】

青枯病

留意事項

- 1 7～8月の高温時に発生が多い。
- 2 台木を選ぶ時には、穂木との親和性（トマトモザイクウイルス（ToMV）抵抗性因子）にも注意する。

防除方法

- 1 なす科作物（なす、トマト、ピーマン等）の連作を避ける。
- 2 センチュウ防除を徹底する。
- 3 排水を良好にし、過湿を避ける。
- 4 高温時は地温の上昇を防ぐため、敷わらなどを行う。
- 5 発病株は早めに根ごと除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 6 抵抗性台木に接木する。
- 7 苗床、本ぽを土壤消毒する。（**XⅢ**土壤消毒 2土壤病害虫等を対象とした薬剤による

る

土壤消毒（4）参照）

- ・ [バスアミド微粒剤](#)、[ガスタード微粒剤](#) 劇 <—>
【30～60kg／10a 均一に散布して土壤と混和 は種または定植21日前／1回】

萎凋病（いちょうびょう）

留意事項

- 1 地温25℃以上で発生が多くなる。
- 2 センチュウの加害により本病の発生を助長される。
- 3 根腐萎凋病は低温（10～20℃）で発生しやすい。
- 4 台木を選ぶ時には、穂木との親和性（トマトモザイクウイルス（ToMV）抵抗性因子）にも注意する。

防除方法

- 1 発生地では、5年間以上作付けを避ける。
- 2 は種前に、下記のいずれかの薬剤で種子消毒する。
 - ・ [ベンレート水和剤20](#) < 1 > < M 3 >
【200倍 30分間種子浸漬 は種前／1回】または
【乾燥種子重量の0.4% 種子粉衣 は種前／1回】
 - ・ [ホームイ水和剤](#) < 1 > < M 3 > 【200倍 20～30分間種子浸漬 は種前／1回】
- 3 床土は毎年更新する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 4 石灰質肥料を施用し、土壌の酸度を矯正する。
 - 5 窒素質肥料の過用を避ける。
 - 6 排水を良好にする。
 - 7 被害株は早めに根ごと除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
 - 8 耐病性品種を選ぶ。
 - 9 抵抗性台木に接木する。
 - 10 本ぼを土壌消毒する。(XⅢ土壌消毒 2土壌病害虫等を対象とした薬剤による土壌消毒(4) 参照)
- ・ [バスアミド微粒剤](#)、[ガスタード微粒剤](#) 劇 <—>
【20~30kg/10a 均一に散布して土壌と混和 は種または定植21日前/1回】

かいよう病

留意事項

- 1 土壌伝染及び種子伝染する。
- 2 カスミンボルドー、カッパーシン水和剤の成分の一部カスガマイシンの総使用回数は5回以内。

防除方法

- 1 発生地では、4年間程度トマトの作付けを避ける。
 - 2 種子は、55℃で25分間温湯消毒する。
 - 3 資材を消毒する。(XⅣ農業用資材の消毒 参照)
 - 4 わらまたはポリフィルムなどでマルチングを行う。
 - 5 発生地では、芽かき、摘心による2次感染も多いので、ハサミの刃などの消毒を徹底する。
 - 6 芽かき、摘心は株が濡れていない晴天日の日中に行う。
 - 7 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
 - 8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
- ・ [カスミンボルドー](#)、[カッパーシン水和剤](#) <M 1> <2 4> 【1000倍 前日/5回】
・ [マイコシールド](#) <4 1> 【1000~2000倍 収穫開始7日前/2回】

輪紋病

留意事項

- 1 高温乾燥時に発生が多い。
- 2 予防的散布が大切である。
- 3 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブフロアブルは、かぶれやすいので注意する。
- 4 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブフロアブルの成分マンゼブの総使用回数は合計2回以内。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 5 カスミンボルドー、銅シン水剤の成分の一部カスガマイシンの総使用回数は5回以内。
- 6 SDHI剤《7》は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 なす科作物(なす、トマト、ピーマン等)の連作を避ける。
- 2 ほ場内や周辺の除草を行う。
- 3 肥料切れしないように、肥培管理に注意する。
- 4 被害茎葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ジマンダイセン水和剤](#) <M3> 【800倍 前日/2回】
 - ・ [ペンコゼブフロアブル](#) <M3> 【1000倍 前日/2回】
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ロブラール水和剤](#) <2> 【1000倍 前日/3回】
 - ・ [カスミンボルドー](#)、[銅シン水剤](#) <M1> <24> 【1000倍 前日/5回】
 - ・ [ネクスターフロアブル](#) 《7》 【1000倍 前日/3回】
- 7 施設内では、くん煙剤も有効である。(Ⅻ省力安全防除 1くん煙(1) 参照)

ウイルスによる症状

留意事項

- 1 キュウリモザイクウイルス (CMV) やトマトモザイクウイルス (ToMV)、トマト黄化えそウイルス (TSWV)、トマト黄化葉巻ウイルス (TYLCV) などがある。
- 2 キュウリモザイクウイルス (CMV) はアブラムシ類によって伝搬される。
- 3 トマト黄化えそウイルス (TSWV) はアザミウマ類によって伝搬される。
- 4 トマト黄化葉巻ウイルス (TYLCV) はタバココナジラミによって伝搬される。

防除方法

- 1 苗床は、寒冷しゃや防虫ネット(目合0.8mm以下)で被覆し、アブラムシ類及びアザミウマ類、タバココナジラミなどの侵入を防ぐ。
- 2 被害株は早めに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- 3 アブラムシ類(CMV)、アザミウマ類(TSWV)、タバココナジラミ(TYLCV)の防除に努める。
- 4 キュウリモザイクウイルス(CMV)やトマトモザイクウイルス(ToMV)は、ハサミ等で芽かきする際にウイルスが伝搬する可能性が高いため、発病が疑われる株の芽かきは後回しにする。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

コナジラミ類

留意事項

- 1 オンシツコナジラミ、タバココナジラミが発生する。
- 2 タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）を伝搬する。また、タバココナジラミ幼虫が多数寄生すると、果実に着色異常が生じることがある。
- 3 多発すると、すす病が発生しやすくなる。
- 4 天敵寄生蜂のオンシツツヤコバチの放飼前後は農薬散布を控える。
- 5 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、5回以内（但し、培土混和及びかん注は合計1回以内、育苗期の株元散布は1回以内、定植時の土壌混和は1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内）。

防除方法

- 1 施設の開口部に防虫ネット（目合い0.4mm）を張り、成虫の侵入を防ぐ。ただし、高温期に目合い0.8mm以下のネット被覆は作物に高温障害が生じるおそれがあるので注意する。
- 2 栽培終了後、施設を密閉し、施設内の作物残さや雑草に残る虫を殺す。
- 3 発生初期に、天敵寄生蜂のオンシツツヤコバチを放飼する。
 - ・ [エンストリップ](#) <ー(生)>
【野菜類（施設栽培） 25～30株あたり1カード（50頭） 発生初期／ー】
- 4 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) <4 A>
【10g／培土1L 培土混和 は種前／1回】または
【1～2g／株 株元散布 育苗期／1回】または
【1～2g／株 植穴土壌混和 定植時／1回】
 - ・ [ベリマークSC](#) <2 8>
【400株あたり薬量：25ml、希釈水量：10～20L（1株当たり25～50ml） かん注 育苗期後半～定植当日／1回】または
【400株あたり薬量：25ml、希釈水量：20～200L（1株当たり50～500ml） 株元かん注 定植直後／1回】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アグリメック 劇](#) <6> 【500～1000倍 前日／3回】
 - ・ [アフーム乳剤](#) <6> 【2000倍 前日／5回】
 - ・ [グレーシア乳剤](#) <3 0> 【2000倍 前日／2回】
 - ・ [ベストガード水溶剤](#) <4 A> 【1000～2000倍 前日／3回】
 - ・ [ディアナSC](#) <5> 【2500倍 前日／2回】
- 6 施設内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除 1くん煙（1） 参照）

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

アブラムシ類

留意事項

- 1 多発すると、すす病が発生しやすくなる。
- 2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。
- 3 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、5回以内（但し、培土混和及びかん注は合計1回以内、育苗期の株元散布は1回以内、定植時の土壌混和は1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内）。
- 4 ダントツ粒剤の成分クロチアニジンの総使用回数は、4回以内（但し、育苗期の株元処理及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計3回以内）。
- 5 ベリマークSC、ベネビアODの成分シアントラニリプロールの総使用回数は4回以内（但し、定植時までの処理及び定植直後の株元かん注は合計1回以内、定植後の散布は3回以内）。

防除方法

- 1 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングする。
- 2 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) < 4 A >
【1g/株 植穴土壌混和 定植時/1回】
 - ・ [ダントツ粒剤](#) < 4 A >
【1g/株 株元処理 育苗期/1回】または
【1~2g/株 植穴処理土壌混和 定植時/1回】または
【1~2g/株 株元散布 定植後(前日)/3回】
 - ・ [ベリマークSC](#) < 2 8 >
【400株あたり薬量：25ml、希釈水量：10~20L（1株当たり25~50ml） かん注
育苗期後半~定植当日/1回】
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [コルト顆粒水和剤](#) < 9 B > 【4000倍 前日/3回】
 - ・ [トランスフォームフロアブル](#) < 4 C > 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) < 2 3 > 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [ベネビアOD](#) < 2 8 > 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [ウララDF](#) < 2 9 > 【2000~4000倍 前日/3回】
- 4 施設内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除 1くん煙（1） 参照）

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

オオタバコガ

留意事項

- 1 広食性で、多くの作物を加害する。
- 2 早期発見に努め、若齢幼虫時に防除する。

防除方法

- 1 幼虫による被害が大きいため、食害痕や虫フンに注意し、捕殺に努める。
- 2 摘除した茎葉や果実、被害果にも、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 3 施設の開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合4mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- 4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アファーム乳剤](#) <6> 【2000倍 前日/5回】
 - ・ [グレースシア乳剤](#) <30> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [プレバソンフロアブル5](#) <28> 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [ディアナSC](#) <5> 【2500～5000倍 前日/2回】
 - ・ [プレオフロアブル](#) <UN> 【1000倍 前日/2回】
 - ・ [BT剤](#) <11A>（IX野菜類の病害虫防除 3野菜類 参照）

ハスモンヨトウ

留意事項

- 1 若齢幼虫の防除に重点を置く。
- 2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 施設の開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合4mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- 2 ふ化直後～若齢幼虫期には集団で生活しているため、被害葉ごと除去する。
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [グレースシア乳剤](#) <30> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [ディアナSC](#) <5> 【2500～5000倍 前日/2回】
 - ・ [ヨーバルフロアブル](#) <28> 【2500～5000倍 前日/3回】
 - ・ [アクセルフロアブル](#) <22B> 【1000～2000倍 前日/3回】
 - ・ [BT剤](#) <11A>（IX野菜類の病害虫防除 3野菜類 参照）

トマトキバガ

留意事項

- 1 令和5年10月に特殊報を発出した。
- 2 トマト、なす、ピーマン、とうがらし類などのなす科植物で発生する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

- 1 施設の開口部に防虫ネット（目合0.4mm以下）を展張し、成虫の侵入を防ぐ。ただし、高温期に目合い0.8mm以下のネット被覆は作物に高温障害が生じるおそれがあるので注意する。
- 2 被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに持ち出し、適切に処分する。
- 3 発生を確認したら、下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アファーム乳剤](#) <6> 【2000倍 前日／5回】
 - ・ [グレースシア乳剤](#) <30> 【2000倍 前日／2回】
 - ・ [コテツフロアブル](#) 劇 <13> 【2000倍 前日／3回】
 - ・ [プレオフロアブル](#) <UN> 【1000倍 前日／2回】
 - ・ [ダブルシューターSE](#) <5> <-> 【1000倍 前日／2回】

ハモグリバエ類

留意事項

- 1 マメハモグリバエ、トマトハモグリバエなどが発生する。
- 2 施設内では一年中発生する。
- 3 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、5回以内（但し、培土混和及びかん注は合計1回以内、育苗期の株元散布は1回以内、定植時の土壌混和は1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内）。
- 4 ベリマークSC、ベネビア0Dの成分シアントラニリプロールの総使用回数は4回以内（但し、定植時までの処理及び定植直後の株元かん注は合計1回以内、定植後の散布は3回以内）。

防除方法

- 1 育苗期の防除を徹底し、本ほに被害苗を持ち込まない。
- 2 施設の開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合0.8mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- 3 被害葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 ほ場内や周辺部の除草を徹底する。
- 5 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) <4A>
【1～2g／株 株元散布 育苗期／1回】または
【1～2g／株 植穴土壌混和 定植時／1回】
 - ・ [ベリマークSC](#) <28>
【400株あたり薬量：25ml、希釈水量：10～20L（1株当たり25～50ml） かん注
育苗期後半～定植当日／1回】
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アファーム乳剤](#) <6> 【2000倍 前日／5回】
 - ・ [ディアナSC](#) <5> 【2500～5000倍 前日／2回】
 - ・ [プレオフロアブル](#) <UN> 【1000倍 前日／2回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [ベネビアOD](#) < 28 > 【2000倍 前日／3回】

ハダニ類

留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ダブルシューターSE](#) < 5 > < - > 【1000倍 前日／2回】
 - ・ [マイトコーネフロアブル](#) < 20D > 【1000倍 前日／1回】
 - ・ [サンクリスタル乳剤](#) < - > 【300～600倍 前日／-】

トマトサビダニ

防除方法

- 1 施設内や周辺の除草、植物残さの処理を徹底する。
- 2 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アフーム乳剤](#) < 6 > 【2000倍 前日／5回】
 - ・ [グレーシア乳剤](#) < 30 > 【2000倍 前日／2回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) < 23 > 【2000倍 前日／3回】
 - ・ [マイトコーネフロアブル](#) < 20D > 【1000倍 前日／1回】

病虫害と間違いやすい生理障害

尻腐れ症

留意事項

- 1 夏期に高温で乾湿の差が激しく、窒素質肥料の肥効が高い時に発生しやすい。
- 2 石灰（カルシウム）欠乏に伴う生理障害である。

防除方法

- 1 堆肥を十分施すとともに、窒素質肥料の過用を避ける。
- 2 深耕し、保水力の強い土づくりに努める。
- 3 結果時に土壌の過乾を防ぐため、敷わら、かん水などを行う。
- 4 施設内の温度の急上昇・高温を避ける。
- 5 各花房の1～3果が、あずき大になった時に、果房とその上下の葉に塩化カルシウム200～300倍液を散布する。

注) マルハナバチに対する農薬の影響は、XVII参考資料 4ミツバチ・マルハナバチ・天敵に対する農薬の影響を参照。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。